

# 石川・指江<sup>さしえ</sup>B遺跡

1 所在地 石川県河北郡宇ノ気町指江

2 調査期間 一九九八年(平10)九月～十二月、一九九九年六月～二〇〇〇年一月

3 発掘機関 (財)石川県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 久田正弘・三谷正輝・大西 顕・藤井秀明

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 縄文時代～中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は、河北潟を見下ろす丘陵裾部に位置する。遺構の主体は古



(津 幡)

墳時代後期～中世のものである。調査は、圃場整備事業の事前調査として行なったもので、二年度に及び計六三〇〇㎡を発掘した。発掘区はA～I区にわけたが、そのうちE区及びG区河道、そしてI区河道から木簡が出土した。E区及びG区の

河道は同一のもので、幅五・五～一〇m深さ〇・五～〇・九mを測る。I区の河道はこれとは別で、幅三m深さ〇・三～一・五mの規模である。木簡は、E区河道一点(1)、G区河道から三点(2)～(4)、I区河道から六點(5)～(10)出土している。木簡の年代は八世紀前半から一〇世紀前半である。墨書土器は八世紀の「大宮」「小神」「羽咋郡」「寺」「多真利」「夜乎」「倉人」「美奴九」、九世紀～一〇世紀前半の「大」「吉」「家」に分かれる。

なお、古墳時代後期の遺物も多く、多量の祭祀関連遺物が出土している。遺跡の祭祀性は奈良・平安時代も引き継がれ多量の墨書土器、赤彩土師器が出土している。この時期はE・G区の谷筋とI区の谷筋で遺物の性格が神社系と寺院系に分かれており興味深い。

8 木簡の积文・内容

## E・G区河道

(1) 「大國別社□□略撰被集厄第□□佐□阿加□□

□□田□□穗根」 857×30×24 011

(2) ・ 江沼臣□末呂事依而□

・ □一石在止母□□」 (190)×31×5 019

(3) ・「道□道郡部為□□

・「馬カ」  
□□人  
石人

(168)×42×4 019

(4) □□ □

(180)×(15)×4 059

Ⅰ区河道

(5) □□□□□□□□□□

(155)×(17)×9 081

(6) 「<磯寫原」

82×18×3 032

(7) 段百廿一  
段七十九歩

(125)×66×15 019

(8) 大

(69)×(33)×4 081

(9) □□ □□ □□

(10)×(162)×6 081

(10) ・□□□□□□ □

・ □□□□□□

(210)×(14)×5 081

(1)は長大な木簡で、形状から地面に立てて境界などの目印として使用したと思われる。神社名と見られる「オオクニワケ社」の記載がある。「祓集厄」の記載から厄を祓うために使用されたものと推定される。

(2)は、裏面中央部分に長軸方向に細長くやや深いケズリが観察され、カットグラス状ケズリと想定される。「江沼臣□末呂が事に依りて……□□一石在りとも□」と読める。日本語の語順（「事依而」）や万葉仮名（「止母」）が使用されている点が注目される。

(3)は、「人」「道」といった同字が続くことから習書の可能性がある。

(6)は、下面には表面より刃物を入れたキリ・オリ技法の痕跡が明瞭に残る。沿岸部の地名が記載された付札木簡と推定される。

(7)は、田数が記されている。箱物などを作るために、加工途中であった材に記された可能性がある。

(9)は、横材である。

## 9 関係文献

新井重行「指江B遺跡出土一号木簡」(勲石川県埋蔵文化財センター「宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡」二〇〇二年)

湯川善一「指江B遺跡出土二一〇号木簡」(同右)

(大西 顕)



(6)



(3)



(2)



(1)



(8)



(7)



(4)



(5)



(10)



(9)